JMU JOURNAL ジャーナル

THE JOURNAL OF
JAPAN MANDOLIN UNION

No. 196
（2005年9月1日）

【目次】

マンドリンと音楽のはざまで（4）	2	清正寛
ドイツ・マンドリン音楽家探訪記（その4） シュテフェン・トレッケル	4	柴田高明
哀悼 追悼の言葉	9	鈴木功
平山英三郎先輩を偲んで	10	小林功
平山英三郎先生を偲んで	11	宮澤栄作
平山英三郎先生のご逝去を悼む	12	石黒不二夫
回想日記	13	五嶋正道
平山英三郎先生NHKラジオ放送演奏記録・一覧	13	五嶋正道
「MOM」=マンドリンオーケストレーションメソッドの研究（11）	15	甲田弘志
日ロジョイントマンドリンギターコンサートに参加して	17	寺田由利子
JMU事務局からのお知らせ	19	
関東支部ブリランテNo.241	20	関東支部事務局
コンサートのお知らせ	21	
関東一円マンドリンクラブ訪問記① 相模原マンドリン倶楽部の巻	22	斉藤総子・富田宏

日本マンドリン連盟

関東一円マンドリンクラブ訪問記①

相模原マンドリン倶楽部 の巻

訪問者：斉藤総子，富田宏

＜前口上＞

ＪＲ横浜線古淵駅から徒歩約１０分の相模原市立大野中公民館に，練習中の同クラブをお訪ねしましたのは去る５月１５日午後のことで，部長の飯田正男さん，技術委員長の福谷隆治さん，指揮の小林淳子さんが応対して下さいました。われわれの来訪を知ってあらかじめホームページの一部を印刷され，２６ページものプリントを手渡されました。これを見れば改めてインタビューすることもないような内容ですが，これには載っていないようなことが聞き出せないかとアタックしてみた次第です。しかしこのクラブの沿革については部長の飯田正男さんのご挨拶がありますので，借用します。

ただしその前に，録音筆記の際，飯田さんと福谷さんのお声がどうしても識別できませんでしたので，やむをえず男声をＥ・Ｆ，女声をＫと略記いたしましたのであらかじめご諒承下さい。

＜ご挨拶＞

「相模原マンドリン倶楽部は，1975年４月，神奈川県立相模原青少年会館のマンドリン教室を母体として発足しました。初めは少人数のアンサンブルで，練習にも各パートが揃わず存亡の危機もありましたが，地道な活動を続けているうちに仲間の輪が広がり，現在は６０名を越す大所帯となりました。毎月３回の練習日には，ほとんどのメンバーが揃い，合奏を楽しんでいます。（後略）」

＜発足から現在まで＞

Ｑ：発足は'75年ということでしたが…

Ｅ・Ｆ：それは前身のマンドリン教室のことで，その２年後の'77年，発表コンサートという形でコンサートを開き，そのとき名称も相模原マンドリン倶楽部と改めたのです。

Ｑ：発足当時の立役者のような方がおられたのでしょうか。

Ｅ・Ｆ：当時は小沢建二郎さんという方がまとめ役をされていました。そのころは青少年コンサートという形でやっていましたからみんな若かったのですね。当時は１０数名くらいだったでしょうか。

その第１回発表コンサートから定演という形がやや定着し，年１回とか１年半に１回とか，たまに２年に１回とか続けています。毎年秋に開催するようなシステムにしたのは，一昨年の総会からです。

Ｑ：そうやって来られて，現在では６０名を越す団体に成長してこられたのですね。

現在，相模原ＭＣとしては，これからどういうようなことをやってやろうと思っておられますか。

Ｅ・Ｆ：基本的には，うちの倶楽部は６０人ということで，大合奏，そのためにはマンドリンオリジナルを核として，それにクラシック曲をマンドリン用にアレンジしたものにチャレンジしています。

Ｑ：練習が月に３回とお伺いしましたが。

Ｅ・Ｆ：毎月土曜が２回，日曜が１回です。そして定演の前に合宿を１泊２日でやっております。今年は９月に，サンピア多摩というところでやる予定です。

Ｑ：定演は，どういうところで。

Ｋ：グリーンホール相模大野というホールです。なかなか取りにくいホールなんですが，取れないときは前後にずらして取るようにしています。

＜選曲と編曲について＞

Ｑ：選曲はどのようになさっていますか。

Ｅ・Ｆ：それはですね。各パートから１名ずつ，選曲委員というのを出してもらっているんですよ。うちには技術委員会と，定演選曲委員会という組織がありまして，この定演選曲委員会のメンバーというのは技術委員長と技術副委員長と指揮者，それにいまいいました各パートからの選曲委員によって構成されています。選曲委員は各パートを代表していますから，希望曲や意見をそれぞれ出してもらって，定演選曲委員会で意見集約を行って，今度の定演はこれで行こう，ということで，基本的に

は６０人の声が反映されていると思っています。

Ｑ：立派な組織をお持ちなんですね。しかしそれでもめることなんかありませんか。

Ｅ・Ｆ：もめるようなことはありませんね。今日のようにオリジナル作品を核として，クラシックアレンジにもチャレンジする倶楽部体系になるまでには，１０年以上の歳月を費やしています。この間，部員間同士の真摯な話し合いと練習の積み重ねによる自然な結晶として今日のような求めるべき音楽の方向性が確立されたといえます。

Ｑ：オリジナルの作品といいましてもいろいろのジャンルが。

Ｅ・Ｆ：邦人の作品もありますし，当然イタリアとかドイツとか，それも特にマンドリンのために書かれた曲が主ですね。

それと，マンドリンとは関係なく，今はやっているいい曲ってあるじゃないですか。それを，あ，こういうような曲をやってみたいな，というとき，うちにはそういう編曲ができる人物が３人いますので，そういう人に編曲してもらって，じゃ，今年はこれをやろうか，ということもあります。

指揮者も今は２部構成ということで，ここにおられる小林さんと，男性の大矢さんという方もおられます。ほかにも指揮実績者，あるいは指揮候補者を含めると全体で５～６人はいると思います。

Ｑ：そういう指揮者のご経歴というのは。

Ｋ：それはいろいろです。毎年春の総会で，立候補した中から２名を決めるので，特別に誰々先生のもとに集まって，というクラブではありません。

Ｑ：それでは，どの曲をやるからどの指揮者というのではなく。

Ｋ：曲よりも先に指揮者が決まります。これは毎年選ぶので，同じ人が選ばれるとは限りません。

Ｅ・Ｆ：来週，総会がありますので，そこで指揮者，役員，パートトップ等も決めちゃうのです。

６０人といえば，企業でいえばいわば大企業ですから，こういう組織がないと，成り立ちません。それがうちの倶楽部の特色なんですね。いかにみんなの声を反映させながら落としどころを見出す，そういうことでしょうね。そうでないと，皆さん納得しづらい。

Ｋ：５月の総会で翌年の演奏会のプロジェクトチームが決まって，今年の定演が終わるまでに選曲しておいて，終わったと同時に楽譜を渡して次の新しい曲を練習し始めるというようなシステムになりましたので，定演の翌週，楽譜がもらえるというのでほとんど全員が出席しました。今までのように空白の時間がなくなって，日々の練習も休まないというのが嬉しいですね。

＜あとがき＞

まだいろいろなお話を伺ったのですが，この倶楽部に特に印象が強かったのは，はっきりした組織をもつ強さ，ということと，時間を無駄にしない，皆が練習を楽しむ，ということでした。出席率が常時80パーセントあるというのも，うなずけることでした。

なお５月２８日の総会で，部長は飯田正男さんから柳生秀人さんに交替されたとのことです。

相模原マンドリン倶楽部ホームページ　http//www.geocities.jp/sagamiharamc/index.html

（さいとう ふさこ：ＪＭＵ関東支部長，とみた　ひろし：ＪＭＵジャーナル編集長）